

原著論文

助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援の シミュレーション教育の学習効果と課題

臼井 淳美¹⁾・中島久美子²⁾・吉野めぐみ²⁾・廣瀬 文乃²⁾

Learning Effects and Issues with Breastfeeding Support Simulation Education for Effective Transition to Midwifery Training

Atsumi USUI¹⁾・Kumiko NAKAJIMA²⁾・Megumi YOSHINO²⁾・Ayano HIROSE²⁾

要 旨

【目 的】 母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指した母乳育児支援におけるシミュレーション教育の学習効果と今後の課題を検討する。

【方 法】 質的記述的研究デザインである。対象は本学助産学生18名であった。調査内容は、シミュレーション教育を実施し、シミュレーション教育後の学習内容と課題、助産学実習後の学びとシミュレーション教育で学びたかった内容等を調査した。

【結 果】 シミュレーション教育後の学び及び助産学実習に活かされた内容は、【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】であった。助産学実習後にシミュレーション教育で学びたかった内容は、【助産実践に活かす多様な授乳支援】であった。

【結 論】 母乳育児支援のシミュレーション教育は、授乳支援に必須の基本的助産技術の獲得と助産師としてのアイデンティティの基盤が形成され学習効果が期待された。今後の課題は、シミュレーション教育前の学生のレディネスとして授乳状況の観察・アセスメントに必要な基礎的知識を習得させる。妊娠期から産褥期まで継続的に母子への支援ができる事例を設定し、授乳支援に必要な助産診断技術を強化する。具体的な授乳支援を助産学実習で補完する教育方略が必要である。

キーワード：シミュレーション教育、助産学教育、助産学実習、母乳育児支援、質的記述的研究

I. 緒 言

助産学実習において学生は、妊娠期から分娩期・産褥期・新生児期と継続的に母子に関わり、正常からの逸脱を予測しながら対象者のニーズに合った助産ケアを展開する。平成27年度乳幼児栄養調査によると、約

95%の妊婦が母乳で育てたいと希望しており、褥婦に対する支援として、母乳育児支援が重要な支援となってくる。助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標¹⁾では、「母乳育児に関する知識及び技術を提供し、乳房ケアを行う」とあり、教員や臨床指導者の指導のもと実践できることが求められている。実際の臨床場

1) 前 群馬パース大学保健科学部看護学科 (現 大東文化大学スポーツ・健康科学部看護学科) 2) 群馬パース大学看護学部看護学科

面の産褥期支援において、母乳育児支援は大きな比重を占める。しかし、実習前の講義や演習だけでは対象の理解は難しく、さらに授乳時における褥婦のニーズもイメージしづらい。

近年、看護学教育において、学生が主体的に学び、臨床の現場においてより実践的な行動に役立つ教育方法の一つとしてシミュレーション教育が注目されている。大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告²⁾では、出生数が減少傾向にある中、シミュレーション教育の導入等、演習の充実を図り、妊娠期から子育て期にある母子と家族を切れ目なく継続的に支援する能力の向上を担保し、演習と実習の有機的連動を検討することの必要性が提言されている。これまで、助産学生を対象としたシミュレーション教育の効果についての研究は、分娩期を対象としたものが多く³⁻⁵⁾、産褥期、特に母乳育児支援の場面对象とした日本国内における報告はない。母乳育児支援は、母児ともに多くの観察の視点が必要となり、授乳について自己選択ができるよう褥婦の気持ちに寄り添う支援が重要となる。そこで、シミュレーション教育において授乳場面を観察し、アセスメントにつなげる力を養うことで、実習へのスムーズな移行を目指すことができるのではないかと考えた。

2016年に開講した本学の助産師課程では、助産学演習科目において、妊娠期、分娩期、産褥期、新生児期の各期の事例を設定し、シミュレーション教育を導入した。妊娠期におけるシミュレーション教育では、妊娠期の基本的助産技術の獲得と必要な知識の再確認、コミュニケーション技術の向上が期待でき、助産師としてのアイデンティティの基盤が形成され、助産学実習前の準備性を高める学習効果が示唆された⁶⁾。そこで今回、産褥期の母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学生の学びと助産学実習で活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の在り方を検討する。

II. 目 的

産褥期の母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容と、助産学実習に活かされた内容を明らかにし、助産学実習への効果的な移行を目指したシミュレーション教育の学習効果と今後の課題を検討する。

III. 用語の定義

シミュレーション教育：臨床の事象を、学習要素に焦点化して再現した状況の中で学習者が人や物にかわりながら医療行為やケアを経験し、その経験を学習者が振り返り検証することによって専門的な知識・技術・態度の統合を図ることを目指す教育（学習）⁷⁾

IV. 方 法

1. 研究デザイン

研究デザインは質的記述的研究デザインである。

2. 研究対象者

対象は2016年度～2018年度に本学助産師課程を選択した学生18名である。

3. 本学におけるシミュレーション教育の概要

1) 学習目標

助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標¹⁾では、「母乳育児に関する知識及び技術を提供し、乳房ケアを行う」とあり、教員や臨床指導者の指導のもと実践できることが求められている。本学では母乳育児支援のシミュレーション教育の学習目標を以下の2つとした。

- (1) 産褥期の乳房の状態を把握するために必要な技術（観察・授乳支援）について習得できる
- (2) 授乳場面のシミュレーションから必要な援助について考察し、実施できる

2) 母乳育児支援シミュレーション教育の位置づけ

阿部⁷⁾のシチュエーション・ベースド・トレーニングを参考に、以下(1)～(5)の手順に沿って学習を進めた。

(1) 事前学習

母乳育児支援のシミュレーションに必要な知識として、助産診断技術学の講義において、乳房の解剖生理や母乳育児支援の基本を学んだ。その際、3年次の母性看護学実習における褥婦の授乳場面を想起させ、より具体的な学びとなるよう意識付けを行った。

(2) ブリーフィング

学習目標、事例紹介を行い、シミュレーションで行う課題を説明した。シミュレーションは、学生が2人1組（褥婦役・助産師役）となり、授乳

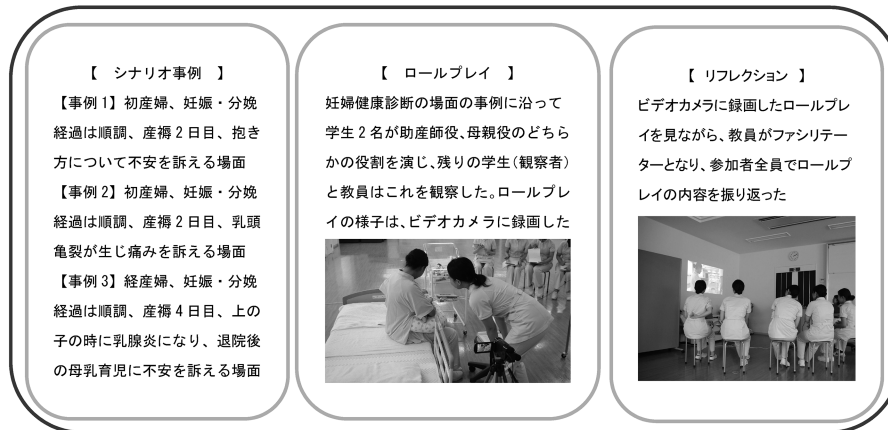


図1 母乳育児支援のシミュレーション教育の実際

場面のシミュレーションを実施した。学生には役割を発表した後、褥婦及び新生児の状況などが記載されたシナリオを渡し5分間で状況設定を理解させた。

シナリオ事例は、学生が受け持つ正常な産褥経過の母子で、授乳場面で遭遇する可能性がある事例を教員間で検討し3事例を作成した。(図1)

(3) シミュレーションの実際(ロールプレイ)

ロールプレイはブリーフィングで示された課題に沿って、産後の個室の環境を再現した空間で、学生を助産師、褥婦の役割をランダムに配置し実施した。また、各場面のシミュレーション中、残りの学生と教員は観察者となり、行動チェックリスト(図2)の項目に沿って観察し、リフレクション時の振り返りに活用した。また、各場面のシミュレーション中の様子を全体の様子が分かる角度から、教員がビデオ撮影した。

<p>〈行動チェックリスト〉 肯定的評価ができれば☑</p> <p><input type="checkbox"/> 母親の顔を見て話すことができる</p> <p><input type="checkbox"/> 母親を否定せずに温かい声かけができる</p> <p><input type="checkbox"/> 母親の健康状態を把握できる</p> <p><input type="checkbox"/> 母親の心理状態を把握できる</p> <p><input type="checkbox"/> 新生児の状態を把握できる</p> <p><input type="checkbox"/> 「直接授乳観察用紙」を用いて、母親と新生児の観察ができる</p> <p><input type="checkbox"/> 母親と新生児に必要な援助を考えることができる</p>
--

図2 母乳育児支援シミュレーション行動チェックリスト

(4) リフレクション

シミュレーション終了後に、学生および教員でリフレクションを行った。リフレクションでは褥婦役・助産師役の学生及び観察者、それぞれの視

点から振り返り、さらに、ビデオ撮影した動画を再度閲覧することによる気づきについて振り返りを行った。学生は自分の理解や思考過程などを言語化しながら、ディスカッションを行った。

(5) まとめ

演習終了後、実習に向けた課題を文章にて明確化した。その課題を実習までに達成できるよう個人で事後学習を進めた。

4. 調査方法および内容

本学における母乳育児支援のシミュレーション教育終了後および助産学実習終了後に、自記式質問紙を用いて学びの内容について調査した。調査項目は、以下のとおりである。

1) シミュレーション教育終了後の学びの内容

中島ら⁶⁾のシミュレーション教育に関する学生の学びを参考に、①ロールプレイを通じた学び、演じること、それを見ることにより自己理解に繋がった内容、②リフレクションを通じた学び、自己理解に繋がった内容、③演習を終えて実習に向けての課題の3つを自由に記載してもらった。

2) 助産学実習終了後の学びの内容

助産学実習では1事例の継続妊婦を妊娠中期から分娩、産褥1カ月まで受け持つ。学生は継続妊婦を通して、妊娠期からの母乳育児の支援、分娩直後の母子相互作用、産褥入院期間の母乳育児に関する観察と援助を行い、産褥1カ月まで継続した関わりを持つ。よって、助産学実習での学びを実習全体を通しての学びとし、①実習全体を通して活かされた内容、②シミュレーション教育で学びたかった事の2つを自由に記載してもらった。

母親の名前：

児の名前

日齢：

授乳がうまくいっているサイン	困難がありそうなサイン
全体	
【母親】	
<input type="checkbox"/> 健康そうにみえる <input type="checkbox"/> リラックスしており、居心地がよさそう (無理のない姿勢) <input type="checkbox"/> 母親と赤ちゃんとの絆のサイン (自信のある抱き方、目と目を合わせる)	<input type="checkbox"/> 病気または落ち込んでいそうにみえる <input type="checkbox"/> 緊張しており、不快そうにみえる (肩に力が入る、無理な姿勢をとっている) <input type="checkbox"/> 母子が目を合わせない (こわごわ抱いている、赤ちゃんに触れ合いがない)
【赤ちゃん】	
<input type="checkbox"/> 健康そうに見える <input type="checkbox"/> 穏やかでリラックスしている <input type="checkbox"/> 空腹時、乳房に向かったり探したりしている	<input type="checkbox"/> 眠そう、具合が悪そうにみえる <input type="checkbox"/> 落ち着きがない、泣いている <input type="checkbox"/> 乳房に向かわない、探さない
乳房	
<input type="checkbox"/> 健康そうにみえる (柔らかくはりがある、皮膚損傷がない) <input type="checkbox"/> 痛みや不快感がない <input type="checkbox"/> 乳輪から離れた位置でしっかり指で支えられている <input type="checkbox"/> 乳頭の突出	<input type="checkbox"/> 発赤、腫脹、あるいは疼痛 (過度の乳房緊満) <input type="checkbox"/> 乳房や乳頭がいたい <input type="checkbox"/> 乳輪に指がかかったまま乳房を支えている <input type="checkbox"/> 乳頭が扁平(陥没)で、突出していない
赤ちゃんの体勢	
<input type="checkbox"/> 頭と体がまっすぐになっている <input type="checkbox"/> 母親の身体に引き寄せられて抱かれている <input type="checkbox"/> 赤ちゃんの体の全体が支えられている <input type="checkbox"/> 赤ちゃんが乳房に近づくと、赤ちゃんの鼻が母親の乳頭の位置にある。	<input type="checkbox"/> 授乳をするのに、首と頭がねじれている <input type="checkbox"/> 母親の身体に引き寄せられて抱かれていない <input type="checkbox"/> 赤ちゃんの頭と首だけで支えられている <input type="checkbox"/> 乳房に近づくと、下唇、下顎が乳頭の位置にある
赤ちゃんの吸着	
<input type="checkbox"/> 乳輪は赤ちゃんの上唇の上部のほうがよく見える <input type="checkbox"/> 赤ちゃんの口が大きく開いている <input type="checkbox"/> 下唇が外向きに開いている <input type="checkbox"/> 赤ちゃんの下顎が乳房に触れている	<input type="checkbox"/> 下唇の下部のほうが見える <input type="checkbox"/> 口が大きく開いていない(おちょぼ口) <input type="checkbox"/> 唇をすぼめている、もしくは巻き込んでいる <input type="checkbox"/> 下顎が乳房についていない
哺乳	
<input type="checkbox"/> ゆっくり深く、休みのある吸啜 <input type="checkbox"/> 哺乳している時は頬が膨らんでいる <input type="checkbox"/> 哺乳を終える時は、赤ちゃんが乳房をはなす <input type="checkbox"/> 母親がオキシトシン反射のサインに気がつく (乳汁が漏れたり、ジンジンしたりする感覚) <input type="checkbox"/> 飲んでいるように見えたり、飲み込む音が聞こえたりする	<input type="checkbox"/> 早くて浅い吸啜 <input type="checkbox"/> 哺乳している時に頬が内側にくぼむ <input type="checkbox"/> 母親が赤ちゃんを乳房からはなしてしまう <input type="checkbox"/> オキシトシン反射のサインに気がつかない <input type="checkbox"/> 舌打ちするような、舌を鳴らすような音が聞こえる (チュパチュパといった音)
備考(上記の項目以外で、授乳(母親の乳房の状態)に関して特記すべきことを記載する)	

・UNICEF / WHO 赤ちゃんとお母さんにやさしい母乳育児支援ガイド ベーシック・コース「母乳育児成功のための10カ条」の実践, P166 一部改変(括弧の内容を追加)

図3 直接授乳観察用紙

5. 分析方法

シミュレーション教育および助産学実習終了後の学びの内容は、記述内容の出現を算出するための最小限の内容である記録単位を決定し、コード名を付けた。それぞれのコードの意味表現の同質性、異質性に基づき分類し、サブカテゴリ名毎に記録単位を抽出および算出した。その後、カテゴリ、テーマの抽出を試みた。分析の過程では、質的研究法を熟知した助産学の研究者4名で精度を高めるために話し合いを繰り返し、分

析結果の信頼性の確保に努めた。調査期間は2017年3月～2019年3月であった。

6. 倫理的配慮

学生へは、口頭と文書で研究目的および研究方法を説明した。研究への参加・不参加は自由意志であり、参加・不参加に関わらず科目への成績や個人に不利益が生じないことを明示した。質問紙は無記名であり個人が特定されないこと、質問紙の結果は本研究にのみ

使用することを明示した。本研究は所属大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：PAZ16-25）

V. 結 果

助産師学生18名に研究協力を依頼し、研究協力の同意が得られた18名全員から回答を得た。研究参加者のデータは、シミュレーション教育後の学生の学びと課題では、ロールプレイを通した学び75記録単位、リフレクションを通した学び64記録単位、実習に向けた課題66記録単位であった。これらの記録単位を質的・帰納的に分類した結果、ロールプレイを通した学び10サブカテゴリ、4カテゴリ、リフレクションを通した学び、7サブカテゴリ、4カテゴリ、実習に向けた課題、6サブカテゴリ、3カテゴリに集約された。最終的にシミュレーション教育後の学びと課題は、2テーマとなった（表1）。

助産学実習終了後では、実習に活かされた内容27記録単位、シミュレーション教育で学びたかった内容14記録単位であった。これらの記録単位を質的・帰納的に分類した結果、助産学実習に活かされた内容、4サブカテゴリ、3カテゴリ、シミュレーション教育で学びたかった内容、3サブカテゴリ、2カテゴリに集約された。最終的に助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容は、3テーマとなった（表2）。

以下、テーマ（【 】で示す）を構成するカテゴリは〈 〉、文脈の内容が示す記録内容を「 」で示す。

1. シミュレーション教育後の学びと課題（表1）

1) ロールプレイを通した学び

ロールプレイを通した学びは、【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】の2つのテーマに分類された。

【基本的助産診断技術】は、〈母児の全身状態、授乳

表1 シミュレーション教育後の学びと課題

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位
1. ロールプレイを通した学び			
基本的助産診断技術	母児の全身状態、授乳状況を把握するための多面的かつ経時的な観察とアセスメント	1点だけでなく多面的な授乳状況の観察の視点	10
		妊娠・分娩・産後の経過を踏まえた全身状態の情報収集	11
		授乳状況に沿った観察項目と関連性のあるアセスメントの視点	3
	母親の状態に合わせた授乳支援の難しさ	産後の経過や授乳状況を把握に必要な支援を考えることの難しさ	6
助産師のアイデンティティ	母親に安心を与える助産師の態度	母親にとって話しやすい態度・雰囲気づくり	16
		母親の母乳育児の不安を理解した助産師の関わり	12
		母親の母乳育児の気持ちを受容した助産師の関わり	7
		母親の立場を考えた助産師の関わり	4
		褥婦役を通して客観視した母乳育児の自信に繋がる助産師の態度	5
	母親の気持ちに寄り添う助産師の関わり	褥婦役を通して客観視した授乳に伴う羞恥心	1
		合計	75
2. リフレクションを通した学び			
基本的助産診断技術	母児の全身状態、授乳状況のアセスメントと授乳支援	母児の全身状態を踏まえた総合的アセスメント	13
		授乳状況のアセスメントに基づく授乳支援	14
		母親の自立を促す授乳支援	8
助産師のアイデンティティ	母親に安心と信頼を与える助産師の態度	母親にとって話しやすい態度・雰囲気づくり	9
		母親との信頼関係に影響を与える助産師の態度	2
		母親が主体の（望む）母乳育児を支える助産師の関わり	15
		母親の自己効力感を高めるような助産師の関わり	3
		合計	64
3. 実習に向けた課題			
基本的助産診断技術	授乳状況のアセスメントに必要な知識と観察の視点	授乳状況のアセスメントに必要な正確な知識	19
		母児の全身状態を含めた観察の視点	13
		授乳状況を判断するための系統立てた観察の視点	6
助産師のアイデンティティ	母親の母乳育児に寄り添う助産師の精神的な関わり	母親の授乳への想いに寄り添う共感的態度	10
		母親の不安の軽減を図る精神的支援	11
		母親が主体の母乳育児を支える助産師の関わり	7
		合計	66

表2 シミュレーション教育での学びが助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容

テーマ	カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位	
1. 助産学実習に活かされた内容				
基本的助産診断技術	実践に活かされた授乳状況のアセスメントと授乳支援	シミュレーションで学んだ観察とアセスメントの視点	8	
		シミュレーションで学んだ授乳支援	6	
	個別性を考慮した授乳支援	個別性を考慮した授乳状況のアセスメントと支援	7	
助産師のアイデンティティ	母親の気持ちに寄り添う助産師の関わり	母親の気持ちを受容した助産師の関わり	6	
			合計	27
2. シミュレーション教育で学びたかった内容				
助産実践に活かす多様な授乳支援	実践に活かせる具体的な授乳支援	具体的な乳房の観察や母乳育児支援	8	
		授乳支援に活かせる保健指導	2	
	乳房トラブルに対応できる助産技術	乳房トラブルに対応できる助産技術	4	
			合計	14

状況を把握するための多面的かつ経時的な観察とアセスメント)、〈母親の状態に合わせた授乳支援の難しさ〉の2カテゴリが抽出された。学生は、授乳場面では、1点だけでなく広い視野で観察し、妊娠から分娩、産後と経時的に情報を捉える視点を学び、一方で母親の状態に合わせて授乳支援することの難しさを学んでいた。

「母親の姿勢や授乳環境を観察して、広い視野をもって観察をしていくことが大切であると学んだ」「授乳だけを見るのではなく、お母さんの身体的、心理的な状態、母乳育児への意欲と妊娠期からの変化、赤ちゃんの状態など総合的に観察していくことが必要であると学んだ」「褥婦さんに伝える時に、正常から逸脱している状況に対して褥婦さんを不安にさせないためにはどのような声掛けが出来るかについて考え対応する事が難しかった。」

【助産師のアイデンティティ】は〈母親に安心を与える助産師の態度〉〈母親の気持ちに寄り添う助産師の関わり〉の2つのカテゴリが抽出された。学生は、褥婦役・助産師役を通して、助産師の話しやすい態度や労いの言葉がけが安心感や母乳育児の自信に繋がり、助産師の態度が母親に与える影響について学んでいた。

「褥婦を演じて、助産師がしっかりと顔を見て話してくれることで、こちらに関心があり、気にかけてくれているというのが伝わった」「助産師として褥婦の言葉を傾聴し、具体的に一つ一つ確認し解決できるように関わる必要があると学びました」「褥婦役をやってみて、労いの言葉や、褒める言葉が自信につながるということを実感した」「自分が褥婦役をすると、助産師に授乳の場面を静かに見られていることに抵抗を感じ、出来る限り早く授乳を終わらせようとした。実

際に見られていることに抵抗を感じる方は多くいると考えたので、自分が何をするために観察しているのかを伝え、(母親が)授乳を見られている事だけに集中しないような(見られているという印象を与えないような)声掛けや会話も大切であると学びました」

2) リフレクションを通じた学び

リフレクションを通じた学びは、【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】の2つのテーマに分類された。

【基本的助産診断技術】は〈母親の全身状態、授乳状況のアセスメントと授乳支援〉〈母親の自立を促す授乳支援〉の2カテゴリが抽出された。学生は、母親の全身状態を踏まえたアセスメントとその診断に基づいた授乳支援、さらに母親自身が一人でも自立して母乳育児を継続できる支援が重要であることを学んでいた。

「授乳や乳房の状態だけでなく、きちんと母親の健康状態を把握し、アセスメントにつなげていけるよう情報収集していく必要性を学んだ」「『いつものようにあげてみてください』と普段の様子を観察し、何ができていて何ができていないのか明確にして、できることは褒めて、できないことは、具体的に正しい方法を伝えていく」「効果的なラッチオンがどのようなものか母親に伝えておくことで、母親が1人でも授乳が続けられるように援助する必要があると学んだ」

【助産師のアイデンティティ】は、〈母親に安心と信頼を与える助産師の態度〉〈母親が主体の母乳育児を支える助産師の関わり〉のカテゴリが抽出された。学生は、母親にとって話しやすい態度や雰囲気づくりが重要であり、助産師の一時的な関わりでなく、母親が母乳育児の主体となり、自己効力感を高められるような助産師の関わりを学んでいた。

「助言や声かけは、一方的ではなく、相手の視野に入り、母親の反応をみながら行うことで母親との関係が築けていくとわかった」[情報提供の際は、主体は母親であることを改めて感じ、その提案が押し付けにならないように言葉の選択や伝え方が重要であると感じた]「授乳の様子を観察した際には、よくできていた部分は、褥婦自身が意識できるようにほめる事で、何が良いかを褥婦自身の体験の中から意識でき、何が良かったのかを実際に理解できるだけでなく、これで良かったという自己効力感へ繋がると感じました」

3) 実習に向けた課題

実習に向けた課題は、【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】の2つのテーマに分類された。

【基本的助産診断技術】は、〈授乳状況のアセスメントに必要な知識と観察の視点〉が抽出された。学生は、根拠に基づく授乳支援のためには必要な知識を得ること、母児の全身状態の観察と系統的な観察の視点を持つことを課題としていた。

「何を説明するにも根拠がないと納得することが難しいと感じ、観察したことをその場でアセスメントすることができるよう知識を十分に身に付ける必要があると感じた」[授乳を観察することは母の身体的・精神的状態や児の状態など全体像を把握していくことが大切であると学んだ]「短い時間の中でもその時の褥婦さんの状態をアセスメントするために事前に情報を集めるだけでなく、この褥婦さんは特にどんな所に注意して観察する必要があるのか整理した上で多くの情報を広くとっていくことが課題である」

【助産師のアイデンティティ】は、〈母親の母乳育児に寄り添う助産師の精神的な関わり〉(母親が主体の母乳育児を支える助産師の関わり)のカテゴリが抽出された。学生は、母親の気持ちを受け止め、不安な気持ちに寄り添える態度を身につけたいと考え、助産師の一方的な関わりでなく母親が主体の母乳育児をできるように関わりたいという助産師の態度を課題としていた。

「課題として、褥婦の想いを真摯に受け止め、寄り添っていく姿勢や言葉掛けを身につけていきたい」[褥婦の不安や悩み、訴えに真摯に向き合う姿勢が助産師として必要となるため、褥婦のもとへ行く前に情報収集を行い、不安や悩みなどどのようなものがあるかをある程度予測してから関わるということを課題とした]「母親は一生懸命授乳をしているため、指導内容を押し付けたりせず1つの提案として提示していき、

一つ一つ確認しながら話を進めていけるように、余裕と自信をつけたい」

2. 助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容(表2)

1) 実習に活かされた内容

【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】の2つのテーマに分類された。

【基本的助産診断技術】は、〈実践に活かされた授乳状況のアセスメントと授乳支援〉(個別性を考慮した授乳支援)の2カテゴリが抽出された。学生は、シミュレーション教育において、授乳場面では母児をアセスメントし支援すること、さらに母親の授乳に関する心配事へのコミュニケーションの難しさを学び、実習に活かしていた。

「シミュレーション学習で児への声掛けや対応も大切であると学んだので、母子への指導、ケア中に活用できて良かった」[シミュレーションで行っていた授乳についての援助が実習での援助の方法に行かされたと思う]「シミュレーション学習で練習をしても、実際の母親の悩みは多種多様で、難しい質問に返答に迷うこともあるので、実習を想定した会話やシミュレーションは沢山練習しておいて損はないと実感した」

【助産師のアイデンティティ】は、〈母親の気持ちに寄り添える助産師の関わり〉のカテゴリが抽出された。学生は、シミュレーション教育において産後の母親の授乳の大変さを理解できていたことにより、実習の授乳場面では母親への精神的な関わりに活かしていた。

「シミュレーションにより授乳の大変さの理解につながったことで、そこから褥婦への育児の大変さやねぎらいの声かけにつながったと考える」

2) シミュレーション教育で学びたかった内容

シミュレーション教育で学びたかった内容は、【助産実践に活かせる多様な授乳支援】のテーマであり、〈実践に活かせる具体的な授乳支援〉(乳房トラブルに対応できる助産技術)から抽出された。学生は具体的な乳房の観察の視点やマッサージの指導方法、乳房トラブルに対応できる助産技術をシミュレーション教育で学びたかったという内容であった。

「乳管を開通させたり、乳輪・乳頭を軟らかくしたりするマッサージはどのように指導したらよいのか、また具体的マッサージ方法の実際(について学びたい)」[乳頭・乳房トラブルが生じてしまった褥婦への支援方法について詳しく学びたいと感じた]

VI. 考 察

1. 助産学実習に活かされた母乳育児支援のシミュレーション教育の学習効果

助産師教育のシミュレーション教育の学習効果としては、助産技術獲得、知識の獲得、学習者の自信と満足、コミュニケーション技術の向上等が期待されている⁸⁾。本学の母乳育児支援のシミュレーション教育を通じた学びの内容からも、【基本的助産診断技術】【助産師のアイデンティティ】の2テーマがあり、これらは、助産学実習に活かされた内容と概ね同様の内容であったことから、助産学実習に繋がる効果的なシミュレーション教育の学習効果であることが明らかとなった。

1) 基本的助産診断技術

千葉ら⁹⁾は、ロールプレイの一連の流れの中で、自己の知識・技術を統合させそれまで見過ごしてきた不明点を明らかにし、リフレクションを通して自分と他者の意見を比較することや映像で振り返ることで、自らが理解度を再確認し、学びを再発展すると述べている。本学の母乳育児支援のシミュレーション教育では、助産師役・褥婦役のロールプレイを通して、〈母児の全身状態、授乳状況のアセスメントと授乳支援〉が示され、授乳支援の基本的な助産診断技術を学び、学生からの意見や教員の助言、自己の映像を振り返るリフレクションを通して、ロールプレイでは認識されなかった〈母親の自立を促す授乳支援〉を学んでいた。さらに、実習に向けた課題として〈授乳状況のアセスメントに必要な知識と観察の視点〉が示されたことから、シミュレーション教育を通して学生自身が自己の準備不足を認識し、実習に向けた具体的な課題を表出することに繋がったといえる。2019年版「授乳・離乳の支援ガイド」¹⁰⁾の改訂では、授乳を確立するように母子の個別性に応じた継続的な支援や情報提供についての重要性が示されている。本学のシミュレーション教育が助産学実習に活かされた内容は、〈授乳支援の実践に活かされた授乳状況のアセスメントと授乳支援〉と〈個別性を考慮した授乳支援〉であったことから学生は、シミュレーション教育において授乳支援に必須の基本的な助産診断技術の学びを活かし、実習では継続事例の個別性を考慮しながら、母児の全身状態や授乳状況をアセスメントし、授乳支援に活かすことができたと考えられる。

2) 助産師のアイデンティティ

ロールプレイを通して、患者-看護師関係の考察により患者理解が深められ、共感能力が高まり、行動の根拠が熟慮され、学習者の集団としての凝縮性の高まりが期待される¹¹⁾。本学の授乳場面のロールプレイではカテゴリ〈母親の気持ちに寄り添う助産師の関わり〉が示され、褥婦役を通して主観的観点から、また助産師役を通して客観的観点から母親の母乳育児の不安に寄り添い、授乳に伴う羞恥心に配慮することの重要性を学んでいた。つまり、ロールプレイによる褥婦役学生と助産師役学生との関係性により、母親の母乳育児への理解と共感性が高まったと考えられる。リフレクションでは、〈母親に安心と信頼を与える助産師の態度〉が示され、実習に向けた課題では、〈母親の母乳育児に寄り添う助産師の精神的な関わり〉、助産学実習に活かされた内容では〈母親の気持ちに寄り添う助産師の関わり〉が示されたことから、シミュレーション教育を通して学生は、母親の母乳育児を支えるためには、常に安心と信頼されるような助産師の態度や精神的な関わりが重要であることを学習し、助産師としての態度が実習にも活かされていたと考えられる。授乳支援は、看護職者からの一方的な支援ではなく、母親の気持ちに寄り添い、自立した授乳ができるための支援が求められる¹²⁾。シミュレーション教育を通して、疑似体験により患者の気持ちなどを実感することで、患者をみる目や患者の心身の状況を理解する能力が養われ、状況への対応の仕方や患者への接し方がより良いものになる¹³⁾。本学においても、リフレクションでは〈母親が主体の母乳育児を支える助産師の関わり〉が示され、実習に向けての課題においても、同様のカテゴリが示されたことから、学生は、リフレクションにより、客観的に振り返ることや学生間の意見交換や教員からの助言を通して、助産師の一方的な関わりでなく、母親が母乳育児の主体となるような助産師の関わりを学んでいたことが明らかとなった。助産学生は、シミュレーション教育でのロールプレイとリフレクションによって養われた助産師としての態度が実習にも活かされたと認識していた。このことから、シミュレーション教育は、母乳育児中の母親に寄り添い、母親が主体の母乳育児を支える助産師のアイデンティティの基盤を構築する貴重な学習の経験といえる。

2. 母乳育児支援のシミュレーション教育における今後の課題

シミュレーション教育後の実習に向けた課題には、テーマ【基本的助産診断技術】が示され、〈授乳状況のアセスメントに必要な知識と観察の視点〉を学生個々が課題として挙げ、助産学実習に備える必要性を認識していた。経験の浅い助産学生は、産後の母子の経過に見合った授乳状況を系統的にアセスメントすることは難しく、シミュレーション教育前のレディネスとして、基礎的知識の獲得が不十分であったと考えられる。そのため、シミュレーション教育前の学生の準備性として講義と演習の充実を図り、授乳支援に必要な基礎的知識と観察の視点の学習を強化する必要がある。さらに、2022年度より適用される助産師に求められる実践能力と卒業時の到達目標では、産褥期の診断とケアに「母乳育児に関する知識の提供と乳房ケア、授乳について自己選択ができるような支援」が位置づけられている。よって、母親が自ら選択した母乳育児を助産師が支援できるような学習目標を位置づけ、妊娠から産褥期まで継続的に観察、アセスメントできるシナリオ事例の場面設定の工夫を図ると共に、シミュレーション教育と助産学実習の継続事例を併せた助産師教育の充実によって、授乳支援に必須の助産診断技術を強化する教育方略が必要といえる。

シミュレーション教育で学びたかった内容は、テーマ【助産実践に活かす多様な授乳支援】が示された。本学の助産学実習における継続事例の受け持ち妊産婦はローリスクにある女性を対象である。そのためシナリオ事例は、母乳育児のシミュレーション教育の実際で示した様に、3事例が正常な産後の経過を辿る母子であった。ローリスクのシナリオ事例に限定してシミュレーション教育を行うことにより、産後の生理的経過と授乳場面に対応した基本的な助産診断技術の学習効果が期待される。しかし、本学の助産学実習終了後における学生の意見では、〈実践に活かせる具体的な授乳支援〉や〈乳房トラブルに対応できる助産技術〉を学びたかったとあるように、臨床場面では、経時的に変化する母児の全身状態の観察・アセスメントを踏まえて、対象の個別性を考慮した具体的な乳房ケアや授乳支援が必要となる。また、乳房トラブルが生じた際には、その原因や対処を適切にアセスメントし、母親に支援していくことが求められる。さらに昨今、妊娠・出産の高年齢化に伴いハイリスク妊産婦や正常な妊娠・分娩経過を逸脱し産褥早期に母子分離を余儀な

くされる症例を受け持つ学生も存在する。新人助産師の視座から助産学実習において学びたかった内容では、母乳育児支援に対応するための助産師と共に行う乳房の診断、助産師による乳房マッサージ等の見学があり、指導助産師の実践から得られた間接的な学びを明らかにしている¹⁴⁾。つまり、限定されたシミュレーション教育の中だけでは、産後の経時的変化に対応する具体的な授乳支援や乳房トラブル時の対処、ハイリスクの母子への授乳支援を実践することは難しかったといえる。よって助産学実習では、指導助産師と共に母乳育児支援の場に立ち会い、指導助産師が行う乳房の診断や授乳指導の見学を通してアセスメントの視点や具体的な助産技術を養うことにより、シミュレーション教育では学習できない経験を助産学実習で補完し、指導助産師と連携した教育方略が必要であると考えられる。

Ⅶ. 結 論

本研究では、助産師学生を対象にシミュレーション教育後及び助産学実習後の2時点で調査を行い、シミュレーション教育の学習内容と実習に向けた課題、シミュレーション教育が助産学実習に活かされた内容とシミュレーション教育で学びたかった内容を明らかにした。それにより、以下のシミュレーション教育の効果および課題が示唆された。

1. 助産師学生の助産学実習への効果的な移行を目指した実践力を高める母乳育児支援のシミュレーション教育は、授乳支援に必須の基本的助産診断技術の獲得と助産師としてのアイデンティティの基盤が形成され、助産学実習前の準備性を高めるという点で有効である。
2. シミュレーション教育における今後の課題は、シミュレーション教育前に授乳状況の観察・アセスメントに必要な基礎的知識を習得させる。妊娠から産褥期まで継続的な事例設定により母乳育児支援に必須の助産診断技術を強化する。シミュレーション教育では達成できない具体的な授乳支援の経験を助産学実習で補完し、指導助産師と連携した教育方略が必要である。

Ⅷ. 本研究の限界と課題

本研究は、同一大学を修了した学生に限定されてい

るため一般化するには限界がある。特に現在の様々な助産師教育課程の学生では結果が異なる可能性があり、この点においても限界があるという。しかしながら、この点においても限界があるという。しかしながら、シミュレーション教育が助産学実習にどのように活かされたかを学生の視座から明らかにできたことに意義がある。今後は、本研究で明らかにされたシミュレーション教育の課題について、学生のレディネスを整え、シナリオ事例の検討や教授法の改良によってシミュレーション教育の充実を図る一方で、シミュレーション教育での達成が困難な課題について、助産学実習施設と連携した教育方略を計画する必要がある。

本研究の一部は、第59回日本母性衛生学会で発表した(論文内容に関し開示すべき利益相反の事項はない)。

引用文献

- 1) 厚生労働省. 「看護基礎教育検討会報告書」. 更新日時2019-10-16. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557405.pdf>. (参照2021-03-26)
- 2) 文部科学省. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告. 更新日時2020-06-16. https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-0000036_63_1.pdf. (参照2021-03-26)
- 3) 谷口初美, 柳吉桂子, 我部山キヨ子. 状況判断力の向上のためにシミュレーション学習の試みとその学習モチベーション評価. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要: 健康科学. 2011, 第7巻, p.43-47.
- 4) 井闔敦子, 山田奈央, 佐藤綾子, 他. 助産師学生の分娩介助演習におけるシミュレーション教育の効果と課題. 母性衛生. 2017, 57(4), p.686-694.
- 5) 牛越幸子. 4年生の助産教育におけるシミュレーション教育の効果と課題. 神戸女子大学看護学部紀要. 2020, 第5巻, p.37-42.
- 6) 中島久美子, 廣瀬文乃, 臼井淳美, 他. 助産学実習への効果的な移行を目指した妊娠期シミュレーション教育の学習効果と課題. 群馬パース大学紀要. 2021, vol.26, p.5-17.
- 7) 阿部幸恵監修. 看護基礎教育におけるシミュレーション教育の導入 基本的な考えと事例. 東京, 日本看護協会出版会, 2018, p.192, ISBN978-4-8180-2129-7
- 8) 中澤紀代子, 定方美恵子, 高島葉子. 助産師基礎教育におけるシミュレーション教育の現状と課題に関する文献レビュー. 日本シミュレーション医療教育学会雑誌. 2018, no.6, p.71-78.
- 9) 千葉陽子, 我部山キヨ子. 助産学生による妊婦健康診査のシミュレーション学習—助産診断・技術項目の到達度評価と学びのプロセスの分析. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要: 健康科学. 2013, 第9巻, p.36-33.
- 10) 厚生労働省. 「授乳・離乳の支援ガイド」. 更新日時2019-09. <https://www.mhlw.go.jp/content/11908000/000496257.pdf>. (参照2021-11-11).
- 11) 川野雅資. 患者—看護師関係とロールプレイング. 第2版. 東京, 日本看護協会出版会, 1999, p.45-79, ISBN 978-4818006010.
- 12) NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会: 母乳育児支援スタンダード第2版. 東京, 医学書院, 2015, p.512, ISBN978-4-260-02070-1.
- 13) 高橋平徳, 内藤知佐子編集. 看護教育実践シリーズ5 体験学習の展開. 東京, 医学書院, 2019, p.208, ISBN978-4-260-03920-8.
- 14) 中島久美子, 國清恭子, 阪本 忍, 他. 新人助産師の視座から捉えた分娩介助・継続事例実習指導の課題. 日本助産学会誌. 2009, vol.23, no.1, p.5-15.

Abstract

Purpose: The purpose of this research was to clarify the contents of learning through breastfeeding support simulation education and the contents utilized in practical midwifery training. We discuss the learning effects of breastfeeding support simulation and future challenges for the purpose of effective transition to midwifery practice.

Methods: This study followed a qualitative, descriptive design. The subjects were 18 midwifery students at a university. Simulation education was conducted. The survey contents were learning and problems occurring after simulation education, and learning utilized in midwifery training. It also covered that which the students wanted to learn through simulation education.

Results: The contents learned after simulation education and utilized for midwifery training were “Basic midwifery diagnosis and skills” and “Midwife identity.” The contents that midwifery students wanted to learn in simulation education were “Various breastfeeding support for midwifery practice.”

Conclusion: Breastfeeding support simulation education can be expected to help in acquisition of basic midwifery skills essential for breastfeeding support and form the basis of a midwife’s identity. For future tasks, as a preparatory step before simulation education, students should be required to acquire the basic knowledge necessary for observing and assessing breastfeeding conditions. It strengthens the midwifery diagnosis and breastfeeding support skills by creating a situation that can continuously support the mother and infant from pregnancy through postpartum. Additionally, it is necessary to plan an educational strategy that complements the midwifery diagnosis and breastfeeding support skills with midwifery training.

Key words: simulation education, midwifery education, midwifery training, breastfeeding support, qualitative descriptive research